

子どもの世界と発見

木 島 陸 子

年長組になると病気のお友だちの為、災害の為などにかわいいお祈りがひとり出来るようになる。『きょうも一日みんな仲良く遊べますように』。そして皆で、『このお願いを神様にお捧げいたします。アーメン』。心の底から出たこの子どもたちの素直な清らかな祈りこそ、最も神様がお喜びになるところのものであろう。何の知識でも自分で実習し、経験しなければ本当に自分のものとはならない。いわんや人生の生き方を教える神の深い真理は、自分の体験を通してはじめて心からわかるものである。子どもと共に祈り、子どもと共に学び、子どもと共に歩むことがキリスト教育の根本であらう。六月の花の日には、子どもた

ちが一本ずつ持ち寄った美しい草花を、礼拝堂に飾り、花の日の礼拝を捧げる。赤白黄、色とりどりの美しいお花の枝には「お花のように美しく愛の心をさかせましょう」というカードがぶら下っている。礼拝の後、全員で一本ずつお花を手にして近くの落生会病院や消防署、交番、車庫、病気のお友だちや、園児の家庭で最近産まれた赤ちゃんに小さな花束を子どもたちと一しょに持って行くのである。十一月の収穫感謝祭にも子どもたちが一個ずつ持ち寄った果物、野菜を飾り、収穫感謝の礼拝を捧げ、同じく病院や気の毒な子どもたちを收容している施設に持って行く。イエス様は「人にさせたいように人にしなさい。」とおっしゃっ

た。子どもたちは花の日や収穫感謝の日に経験したこと、あのやさしい美しいお心はいつまでも忘れることはないであらう。また、クリスマスと子どもの生活との結びつきも大きく、子どもたちは大きな期待と喜びをもってこれを体験する。このクリスマスの感激こそは、一生涯忘れ得ないものであり、大きな感激の中に学びとることは彼らの血となり肉となるのである。

自由遊びの時の子どもたちは思う存分に活動し、僕たち、私たちの世界であるとかかりに嬉々として戯れている。ある日の午後、滑り台からジャングルをお家にして坊ちゃんお嬢さんが交って七、八人で遊びだした。靴下やハンカチをジャングルにかけて洗濯物を干すと称する。時々おもしろい会話がもれてくる。『お母さんの靴下もたのみますヨ』。『お姉さんお出かけ？』。『あつ、お父さんロボットが家の中へ入って来ますヨ』。『さあみんなでロボットをやっつけましょう』。

「先生、ちょっと見に来て。」とTちゃん
は眼を輝やかせて私の手を引張って砂場
へ連れて行く。行ってみると、そこには大
きな山がうねうねと作られ、木が植えられ
道がついている。川には橋がかけてい
る。「先生すごいやろ」。「先生、これ何山
やと思う?」。「先生これはな、比叡山のドラ
イヴウエイなんや」と四、五人が口々に言
う。「ウワー、とてもいいの出来たのね」と
思わず声が出たくらいの上出来であった。

しかし、その子どもたちが「こわさんとい
てや」とへやに入っている間に、誰かによ
ってこわされていた。Tちゃんはまた眼の
色を変えて私を引張って行く。「〇〇ちゃ
んたちが作ったお山、こんなにこわれてし
まって……あんなに一生果命したのねえ
……と一しよに歎いてやる。こわした子ど
もがそばにいたとすれば、その様子を見て
悪かったと反省するだろうし、民主々義社
会の一員となる子どもたちに、自分だけよ
ければという利己主義的な考えを自然のう

ちに無くしてゆきたいものである。また、
子どもがちょっとでも良い事をした時は、
十分にほめてやり喜んでやりたいものであ
る。「毎朝、お母様に送っていただいてい
たAちゃん、今日からは、もうひとりで登
園出来るようになったのよ」。Aちゃんを
前に呼んで強くなったと皆で拍手をしてほ
めてやる。今まで消極的であった子どもも
それから自信を持つようになるだろうし、
良き方面へ成長する機会ともなるだろう。

毎日の生活の中で、子どもは種々な事を
不思議に思い、自然界のちょっとした出来
事にも、一大発見をしたかのように驚き嘆
声をあげる。私たちはその心の動きを上手
に捕え、とび込んで行かなければならない。
子どもの経験を豊かにするということは、
そうした動きの中に得られるのであるから
である。

「つゆの玉」

せんせい、きてみ、
ちよっときてみ、

おもしろいものある。
それ、
このおすべりの上、
ずうっと
小さい小さい
水の玉
お日さまあたって光ってる。

子どもの生活は散文詩的であり、そして
感情もまた、詩だとすれば、語る一人ひと
りのことは詩である。

「わたしのうさぎ」

わたしのうさぎ、しんじやった。
さわってみたら、
まだ、
あたたかかったの。
でも、
おめめふさいで、
おとても
あしも、
まっすぐにのぼしていたわ。

かわいそうに。

ある秋の日の午後、シーソーに腰かけながらたくさん散った銀杏の葉っぱを集めて、それをつないで首飾りのようなものを作った。

「あのお空からあのお空まで」

いちようのはっぱつづけたら、どこまでいくの。

いちようのはっぱつづけてみよう。

ずつとずつとつづけたら、

きつとみんながびっくりするよ。

あのお空からあのお空まで、

いちようのはっぱつづけよう。

楽しい一日の保育を終えて、子どもたちは帰途につく。帰る道にも子どもたちは多くの疑問を見出し、驚きの眼をみはるのである。

「白いくもさん」

のぶ子ちゃんの方の

あのお空、

ものすごいきれいやわ。

ほれ、綿みたいくも、

ほれ、みとおみ。

ほんまにあのおうたとおんなじや。

追いかけてこしてるみたい。

あれ、犬さんみたいなくもよ。

あのかもさん、

どこへいくの。

三才児の粘土遊びから

馬淵治子

今年の三年保育児が粘土にふれたのは入園してまもなくだった。みんなが自分のものとして自由にふれることが出来るように、それを各自の小箱に入れて与えた。こぶし大の油粘土をみいだした子どもは、は

経験ということは、事物の世界のことに限らない。神と人との関係、人と人との関係、人と物との関係から生ずるさまざまなことを、それからそれへと経験によって学ばねばならない。民主主義社会を担って立つ子どもたちの最も必要なことの芽生えを正しい方向にむけておかなければならないと思う。
(京都・復活幼稚園)

じめてみるものに驚きの目をみはりながらもそろそろとさわっていたり、または「使ったことがある」という、ゆとりのある様子で、うれしそうにとびついていった。中にはほとんど一月あまりもロッカーの中に